

平成 23 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」
P 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

() 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14,437 人 (287 校)	14,428 人 (287 校)	
中学校 2 年	13,651 人 (137 校)	13,470 人 (136 校)	13,571 人 (136 校)

(参考：全県 小学校 20,525 人, 382 校, 中学校 20,659 人, 187 校)

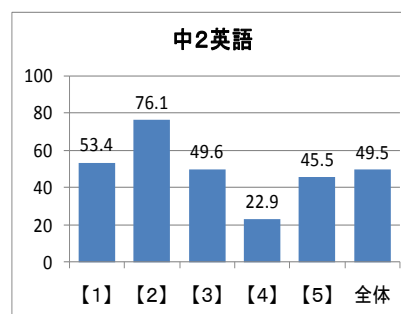
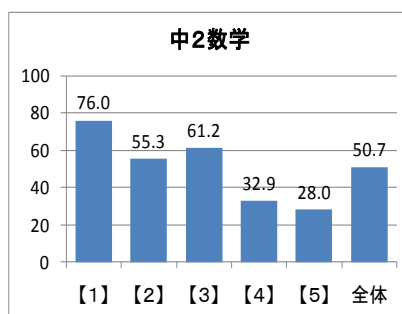
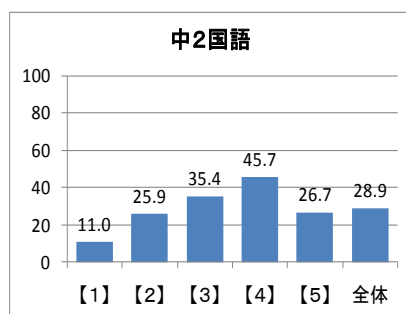
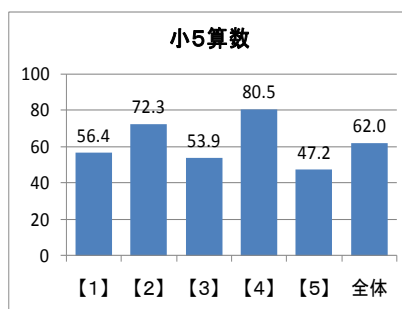
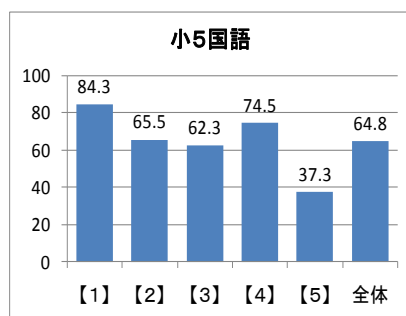
過去の参加状況

		国語	算数・数学	英語
平成 21 年度 P 調査	小学校 5 年	11,223 人 (220 校)	11,383 人 (221 校)	
	中学校 2 年	8,780 人 (95 校)	8,763 人 (95 校)	8,799 人 (96 校)
平成 22 年度 P 調査	小学校 5 年	14,047 人 (273 校)	14,041 人 (273 校)	
	中学校 2 年	11,245 人 (116 校)	11,227 人 (116 校)	11,356 人 (117 校)

2 各問の正答率

(単位%)

問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	全体
小学校 5 年	国語	84.3	65.5	62.3	74.5	37.3	64.8
	算数	56.4	72.3	53.9	80.5	47.2	62.0
中学校 2 年	国語	11.0	25.9	35.4	45.7	26.7	28.9
	数学	76.0	55.3	61.2	32.9	28.0	50.7
	英語	53.4	76.1	49.6	22.9	45.5	49.5



(1) 過去の同一問題について
＜小学校5年算数【1】＞

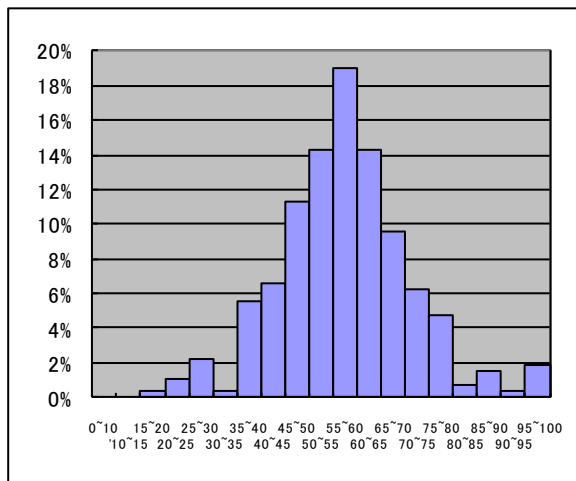
1. $4 + 3$ を計算しなさい。

○正答率の経年変化

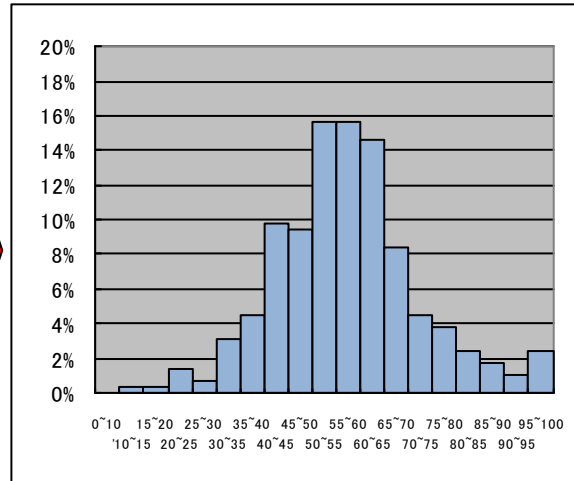
昨年度（H22）56.9%→本年度（H23）56.4%

○学校ごとの正答率の分布（縦軸は学校数の相対度数，横軸は正答率）

昨年度（H22）



本年度（H23）



昨年度とほぼ同様の分布となった。学校による正答率のばらつきが大きく、正答率の低かった学校では、位をそろえて計算することの理解を一層定着させたい。

＜中学校2年数学【2】＞

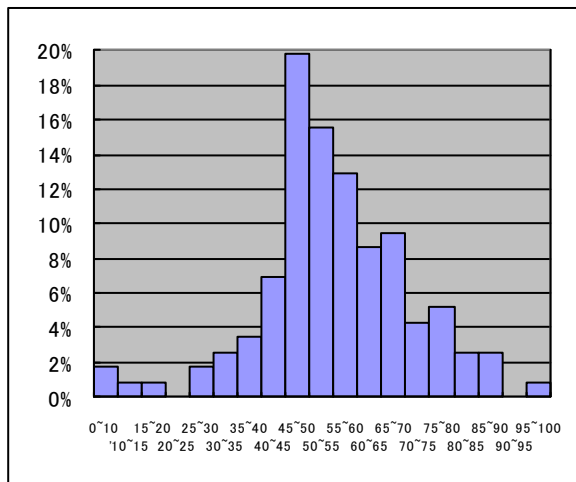
比例の関係 $y = -2x$ のグラフをかきなさい。

○正答率の経年変化

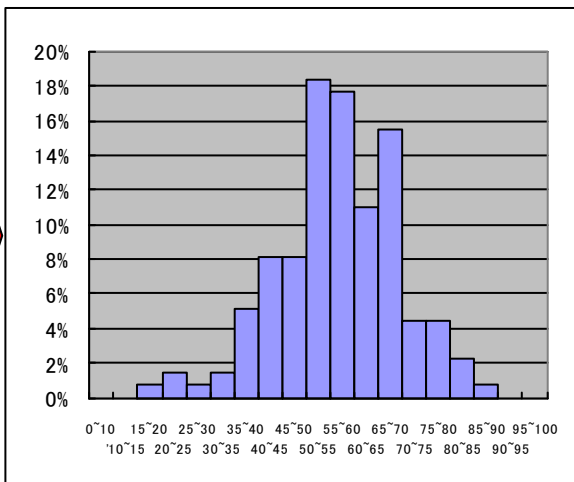
昨年度（H22）54.6%→本年度（H23）55.3%

○学校ごとの正答率の分布（縦軸は学校数の相対度数，横軸は正答率）

昨年度（H22）



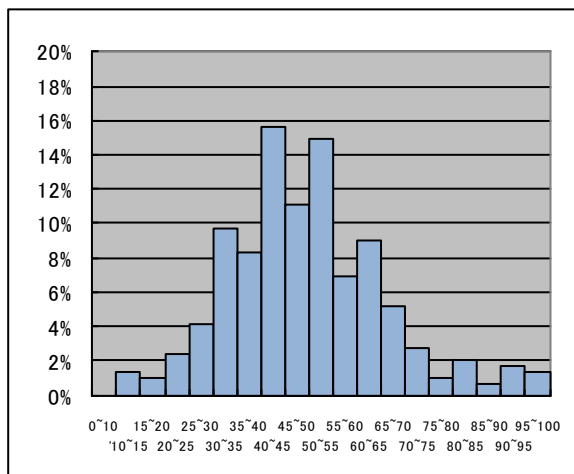
本年度（H23）



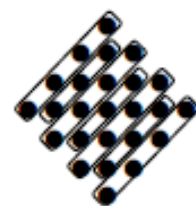
昨年度と比較して、正答率20%未満の学校が減り、50%以上の学校が増えた。さらに、65~70%の学校が増えている。更に確実な定着を図っていききたい。

（２）学校による正答率の分布に特徴がある問題について（学校ごとの正答率の分布より）

< 小学校 5 年算数【5】 > 正答率 47.2%



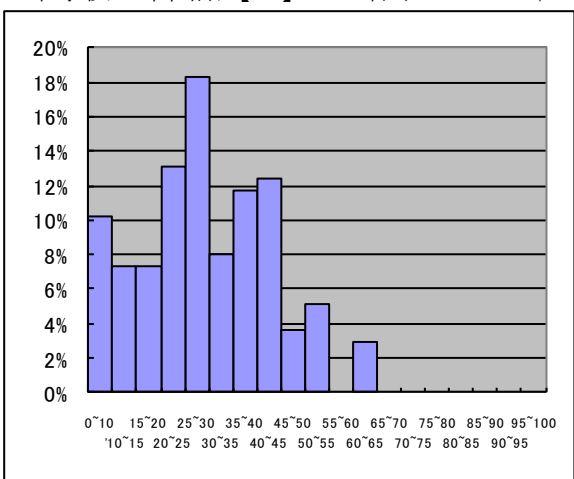
「 $4 \times 4 + 3 \times 3$ の式の説明を、別の囲み方で説明しなさい」



学校ごとの正答率が 10% 台～100% まで広い範囲でちらばっている。式の意味を図や言葉で説明することの定着に、学校による差が見られる。

数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動を、より一層位置づけていく必要がある。

< 中学校 2 年国語【5】 > 正答率 26.7%

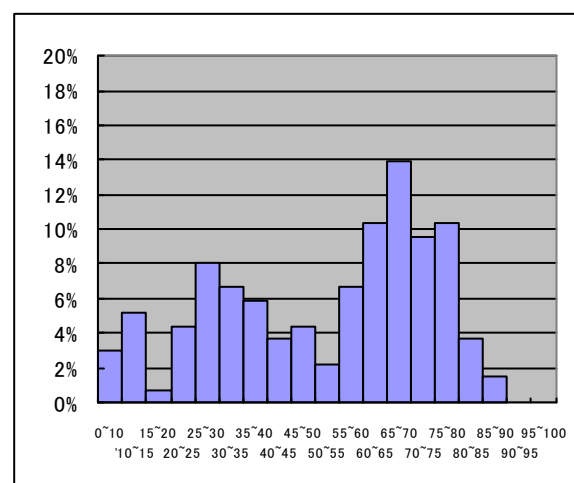


『取材メモ□→取材メモB→まとめ』とつながるために、□に入れるべき取材メモを選び、その選んだ理由を記述する」

学校ごとの正答率が 0～65% の範囲でちらばっており、多くの階級の割合が、ほぼ 10% 前後となっている。目的に応じて、いくつかの資料を対応させて読んだり、主張と関連付けて材料を選んだりする力や、事実や根拠から理由づける力に、学校による差が見られる。

表現の仕方について、根拠を基に自分の考えをまとめ、交流する学習を大切にしていきたい。

< 中学校 2 年英語【1】 > 正答率 53.4%



He is (help) her.

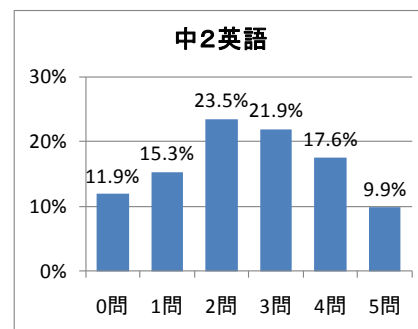
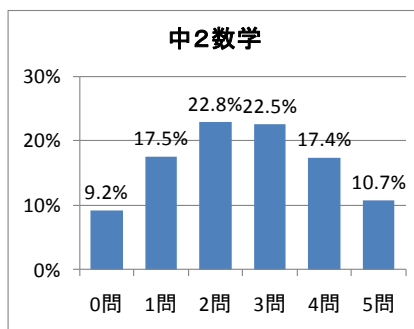
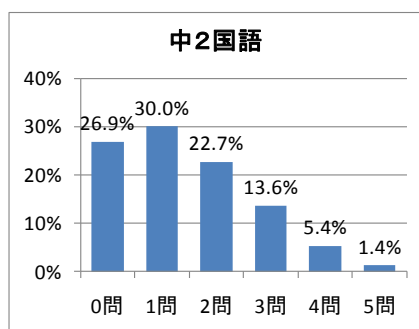
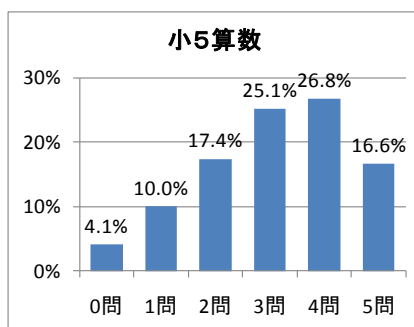
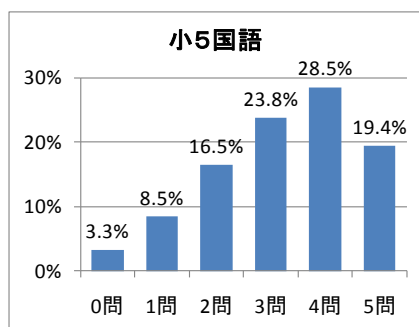
下線部の () 内の語を、最も適切な形になおして、1 語で書きなさい。

学校ごとの正答率が 0～90% の範囲でちらばっており、その中で 25～30% と 65～70% をそれぞれ頂とする 2 こぶ状態になっている。正答率が 25～30% を中心に、現在進行形の理解を図る指導を一層丁寧に行うと共に、十分な口頭練習と「主語＋動詞」に着目させて書く活動を大切にしていきたい。

3 正答数の分布

(単位%)

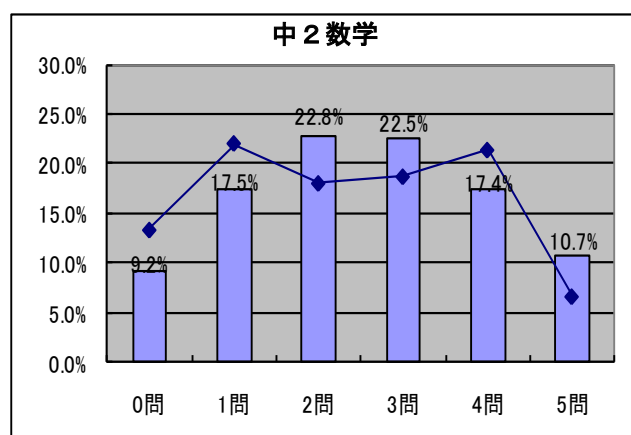
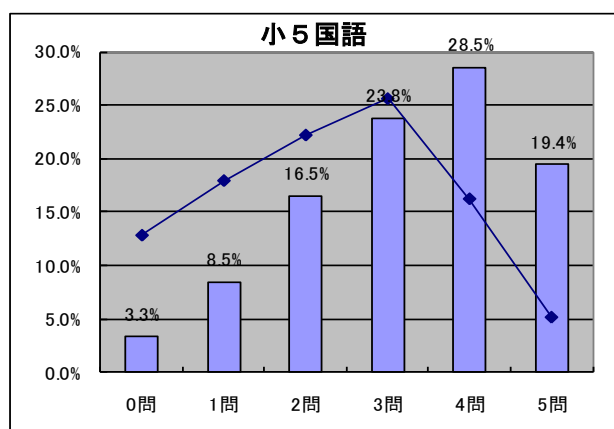
正解数		0 問	1 問正解	2 問正解	3 問正解	4 問正解	全問正解
小学校 5 年	国語	3.3	8.5	16.5	23.8	28.5	19.4
	算数	4.1	10.0	17.4	25.1	26.8	16.6
中学校 2 年	国語	26.9	30.0	22.7	13.6	5.4	1.4
	数学	9.2	17.5	22.8	22.5	17.4	10.7
	英語	11.9	15.3	23.5	21.9	17.6	9.9



小学校では、国語、算数ともに右よりの分布となった。中学校では、国語が左よりの分布、数学と英語では、ほぼ左右対称の分布となった。国語では、漢字の読み書きの正答率が低いことが分布に影響していると考えられる。

各校では、この分布と自校の分布を比較することにより、課題を見だし、対応策を立てることができる。

＜例＞ 棒グラフが県平均、折れ線グラフが自校の分布



このように、県平均と比較して、正答数の分布の山が全体的に左寄りの傾向がある学校は、それぞれの個に対する指導をより一層丁寧に行っていきたい。

このように、正答数の分布がM字型の傾向がある学校は、特に、正答数の少ない子どもの誤答分析を基にした指導の工夫を充実させたい。

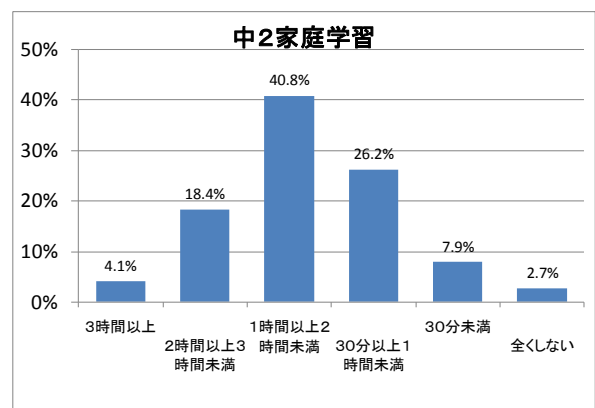
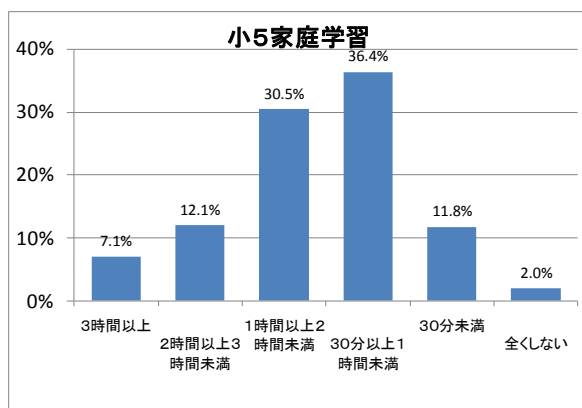
4 家庭学習の時間

◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含みます。）

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上、3時間より少ない |
| 3 1時間以上、2時間より少ない | 4 30分以上、1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 まったくしない |

（単位％）

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30分未満	全くしない
小学校5年	7.1	12.1	30.5	36.4	11.8	2.0
中学校2年	4.1	18.4	40.8	26.2	7.9	2.7

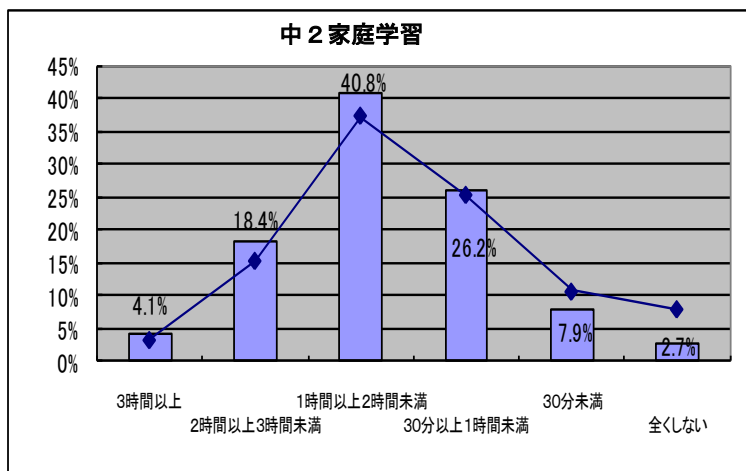


家庭学習時間が1時間未満である児童・生徒の割合が、小学校5年で50%、中学校2年で35%を超えている。昨年度と比べると、小学校はほぼ同様だが、中学校では若干増加している。

小学校5年では、30分～1時間、中学校2年では、1時間～2時間の家庭学習を行っている割合が最も高い。

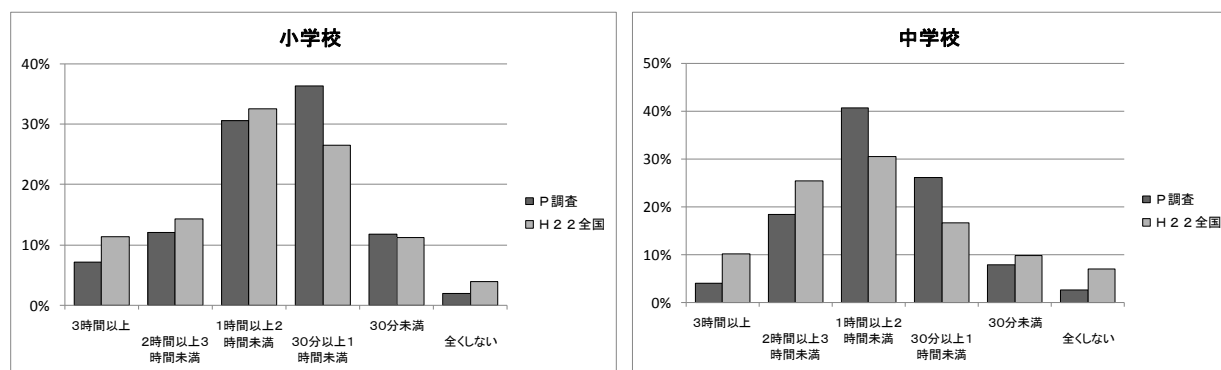
各校では、この分布と自校の分布を比較することにより、課題を見だし、対応策を立てることができる。

＜例＞ 棒グラフが県平均、折れ線グラフが自校の分布



このように、県平均と比較して、30分未満の割合が高い傾向がある学校は、該当する子どもに対して、生活習慣の見返しについて共に考えたり、予習、復習の具体的な方法を助言したりするなど、個に応じた対応策が考えられる。

＜平成 22 年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙結果との比較＞



小学校 5 年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における小学校 6 年の全国平均のデータと比較すると、家庭学習を「全くしない」の割合が、全国の平均と比べて低い。また、30 分未満以上 1 時間未満の児童の割合が高く、1 時間以上の割合は低い。生活習慣を確立させることで、1 時間以上の区分に入る児童の割合を増やしていきたい。

中学校 2 年では、昨年度の全国学力・学習状況調査における中学校 3 年の全国平均データと比較すると、家庭学習時間が 30 分未満である生徒の割合が全国の平均と比べて少ない。しかし、2 時間以上の生徒の割合が低く、苦手な教科の補充学習や、予習復習など、学校からの宿題だけでなく、自分で計画的に家庭学習をしていく習慣を確立させることで、2 時間以上の区分に入る生徒の割合を増やしていきたい。